

六甲山系で進む市民参画のエンパワーメント ～交流の森イベント等による効果～

赤井 裕

株式会社総合環境計画 技術部（〒550-0012 大阪府大阪市西区立売堀1-3-13）

砂防事業の一環として2008年から進められてきた六甲山系GB整備事業の市民参画による森づくりは、情報交換等を促進する交流の森での活動等を通じて各市民団体の連携が深まり、砂防事業の枠にとどまらず、地域活性化も視野にいれた活動を行う団体もあらわれはじめた。本発表は主に交流の森の役割の変遷等をふまえて、市民団体の活動の広がりを報告するものである。

キーワード 六甲山系GB整備事業、森づくり、市民参画、交流

1. はじめに

「エンパワーメント」は多方面で様々な意味で使用されているが、本稿では「持っている能力を顕在化させて、人々の生活、社会の発展のために活かすこと」の意として使用し、国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所が六甲山系で進めてきた市民参画の森づくり活動が砂防事業（森づくり）にとどまらない活動の広がりを報告するものである。

2. 六甲山系グリーンベルト整備事業における市民参画の森づくり

(1) 六甲山系グリーンベルト整備事業

六甲山系グリーンベルト整備事業（以下、「GB事業」という。）は、六甲山麓地域の健全な生活環境を確保するため、阪神大震災を契機に、市街地に接する山腹斜面



図-1 六甲山系GB整備事業対象区域

（図-1参照）に土砂災害防止を主目的としたグリーンベルト（樹林帯）を保全育成する事業である。

土砂災害防止、良好な都市環境や生態系等の保全育成、レクリエーションの場の提供等を目標（図-2参照）として1996年よりはじめられた。

(2) 市民参画による森づくりの仕組み

GB事業では市民活動による森づくりを「広大なグリーンベルトを永続的に維持管理していくうえで、市民の理解と協力を得ることが大切」として、主な施策の一つに位置付けている。2008年6月22日には「六甲山系グリーンベルトの森づくり実施要領（案）」を施行し、本格的に市民が国有地（グリーンベルト事業用地）で活動できる基盤（ルール）を整えた。

このルールに基づき、事務所に登録した市民団体や企業を「森の世話人」と呼んでいる。



図-2 六甲山系GB整備事業の目標

③ 森の世話人への支援

詳細は別稿「六甲山で行っている市民参画による土砂災害に強い森づくりの各種効果について」に譲るが、六甲砂防事務所では、「森の世話人活動支援事務局」（以下「事務局」という。）を設置し、砂防事業の一環として市民参画による森づくりの各種支援を継続的に行っている。

【実施要領（案）に基づく各種支援】

1. 活動地の提供
2. スコップ等、保有資機材の貸与
3. 苗木等、グリーンベルト整備に必要な資材の支給
4. 大径木の伐採、地ごしらえ等、グリーンベルト整備に必要な役務の提供
5. 活動計画書策定等に当たっての助言
6. 道具の使い方その他の技術指導等

【その他の支援】

7. 講習会の開催
8. 専門家による技術支援
9. ハンドブックの作成・配布
10. 情報発信支援
11. その他

3. 森の世話人の活動状況

2020年5月末現在、市民団体と企業あわせて45の組織が森の世話人として登録しており、森の世話人はそれぞれが決められた活動地で樹林整備等を行っている。活動の詳細は別稿「六甲砂防と樹林整備を進める市民・企業の6年の歩みとこれから」に譲るが、主な活動内容は、伐採、植樹、保育、林床管理の他、環境学習、レクリエーション利用、散策路の整備等があげられる。実施要領（案）のできた2008年から2019年末までの累計で森づくり活動は約1,600回行われ、約28,000人が参加した。



写真-1 森の世話人による森づくり状況

4. 交流の森

(1) 交流の森の設置

森の世話人のそれぞれの活動のほか、事務所では年に2回程度、講習会等のイベントを開催していたが、座学が中心であり、団体間の十分な交流ははかれていなかった。そこで、2013年から団体間や、団体と事務所（事務局）の間での情報交換や技術力の向上等を目的とした協働で森づくりを行う場所として「交流の森」を設置し、定期的（3回/年）に森づくりを行うこととした。

(2) 交流の森の役割

交流の森での活動は目的を少しずつ変えながら続いており、今は第三期に位置付けられる。

a) 第一期：森の世話人の連携期 2013年-2014年

当初の活動は参加者を森の世話人に限定し、森の世話人同士の交流や技術力向上を主眼においていた。

交流の森という共通のフィールドで異なる森の世話人が顔をあわせて活動することで森づくりに関する相談等の情報面の連携が進むと考えていたが、交流の森での活動がきっかけで、神戸市東灘区で活動している森の世話人11団体（企業含む）から構成される「ほくら~ととや森の世話人倶楽部」が2014年夏に立ち上がったことは、当初の目的を上回る交流の森の効果であった。この「ほくら~ととや森の世話人倶楽部」の活躍は5(2)で後述する。

なお、交流の森も2年経つと、参加メンバーが固定化しはじめた。



写真-2 交流の森での活動状況

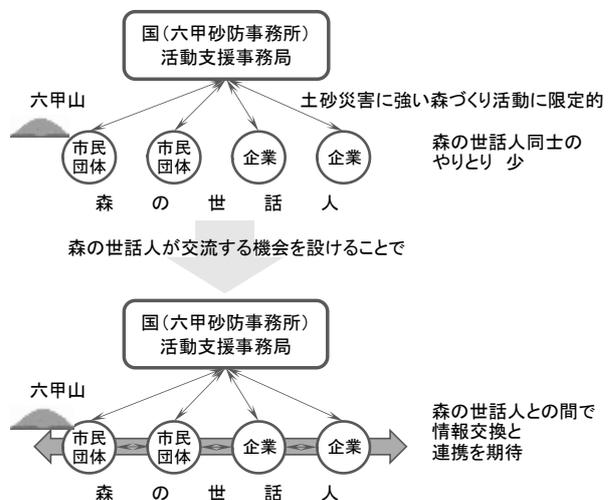


図-3 国と森の世話人の関係

b) 第二期：市民への周知期 2015年-2018年

六甲砂防事務所主催の六甲山サミット（2015年開催）のパネルディスカッションで大学生が「（GB事業は）すごくいい取り組みをされていると思います。ただ、私たち若者のほとんどはそのことを知りません、もっと若者にむけた発信を行ってください」と発言し、一般市民の認知度を高める必要性が事務所内で再認識され、交流の森の参加者を一般にも広げることとした。

ホームページやチラシ等による告知以外にラジオ番組に出演したり、神戸新聞の環境イベントコーナーで紹介してもらうなど、これまでGB事業を知らない層にも広くPRに努めた。

特に若者にむけては、大学を訪問し、大学からボランティア情報として学生に発信してもらえたことで、活動内容や時期によって違いはあるものの、定期的に数人の学生が交流の森に参加するようになった。若者への情報発信としてはほかにも甲南女子大学の松村研究室と共同してゼミ生によるイベント企画（2017年から毎年、開催）等がある。

参加した市民の中にはリピーターとして複数回参加する方や、交流の森で出会った森の世話人の団体に加入し、今では中心メンバーとして活動されている方もいる。

森の世話人も他のボランティア組織と同じように高齢化や後継者不足、マンネリ化で困っているところが多い。六甲砂防事務所として、直接的な支援はできないものの、新たな担い手ととのマッチングの場を提供することで、間接的な支援につながっていると考えている。

また、森の世話人にとって自分たちの活動についての、率直な市民の声を聞くことができる場でもあり、あらためて活動へのモチベーションを高めることにつながっている。

主催者側としてはこれまでと違い、森づくり経験ゼロの初心者が参加することになるため、企画・運営内容の見直し、安全管理の徹底等も必要であった。

そこで、事務所・事務局だけで対応するのではなく、一部の森の世話人に活動時の班長等として運営側にまわってもらうこととした。結果として、森の世話人と事務所の関係性の強化がはかられたと考える。

c) 第三期：利活用期 2018年～

薄暗く近寄りにくかった森の一部が、数年間の森づくり活動によって、明るい開けた空間に生まれ変わった。

そこで、休憩広場や散策路の整備を交流の森での活動メニューに組み込み、大学生のデザインをもとに、伐木を利用した案内板を制作したり、散策路の一部に現地で伐採した木のチップを撒くなど、ハイカーが休憩等に利用しやすくなる環境整備にも着手している。



現地でラジオ収録



学生による企画

写真-3 市民に向けたPR



木がもやし状に生え、林床に陽があたり暗かった森が、明るく開放的な空間に生まれ変わった（左：活動前 右：現在）

写真-4 交流の森の変遷



図-4 交流の森の役割の変遷

5. 動き出した市民～地域活性化への胎動～

(1) 活動の場の広がり

実施要領（案）では森の世話人への個人としての登録は認められていない。そのため、登録団体（市民）の3割にあたる8つの市民団体が森づくり活動を行うために組織を立ち上げている。これらの団体のいくつかは当初の目的であった六甲山系の森づくり以外にも活動の場を広げている。

(2) ほくら～ととや森の世話人倶楽部の例

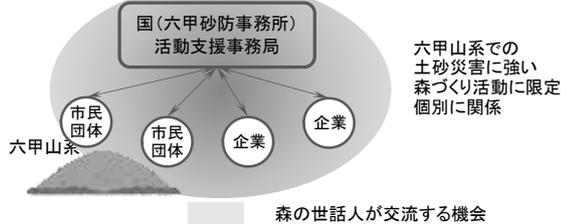
ほくら～ととや森の世話人倶楽部は4(2)で述べたとおり、交流の森を契機にして、複数の森の世話人が構成メンバーとなって発足した組織である。

構成団体共通の課題として、活動参加者の維持拡大、次世代への活動継承等があるため、同団体は、地域社会や地域住民と連携した活動への拡大をめざし、「人をつなぐ・地域につなぐ・次世代につなげる」を倶楽部の目標として活動を展開している。

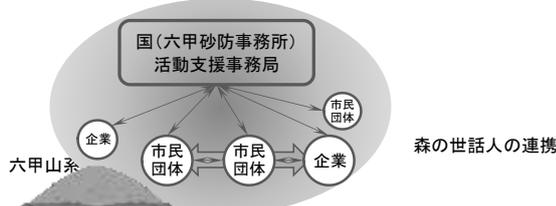
主な活動の桜回廊づくり（登山道沿いにヤマザクラを植樹）は地域社会に密着した憩いの場を目指したものである。

森づくりに関心の高い層を取り込むため、様々な工夫にとりくんでおり、森づくり活動とあわせてミニコンサートを開いたり、お花見会を開催するなど、一部の中高年男性が中心になりがちな森づくり活動を、これまで森づくりと関わったことのない老若男女が十分に楽しめるイベント等を展開している。

【当初の関係性】



【交流の森による効果】



【自発的な動き】

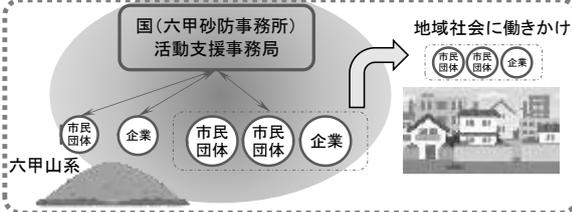


図-5 地域社会に働きかけ

特に2016年4月に開催した「岡本桜回廊を巡るお花見会」は、樹木教室、お花見会、登山道沿いのごみ拾いに加え、地元岡本商店街の協賛を得て、地元アイドルグループ（KOBerieS♪）のミニコンサートが山の中腹で開かれ、六甲山やボランティアに関心の高い若者（30数名）も参加した当日の様子はアイドルグループが「徐々に「神イベ」といえるイベだったな」とTwitterでつぶやくほど盛り上がったイベントであった。

同倶楽部は2018年には神戸ロータリクラブから社会奉仕団体としての感謝状をもらっている。

(3) いたやにすとの例

森の世話人として登録している団体にはもともと地域活性化を目的に活動していた団体もある。神戸市長田区板宿で活動している「いたやにすと」もその1つであり、森の世話人として登録することで、活動の場を商店街を含む市街地だけでなく、板宿の裏山と一体となって「板宿」のまちの魅力向上に取り組んでいる。活動地を含む裏山で親子でどんぐりを拾い、家で育て、育った苗木を活動地に植える記念植樹祭や、子供たちが裏山で遊べるよう、ロープをつかったアスレチックをつくったり（イベント当日のみの設営）と、地元の多くの親子が参加するイベントを企画し、裏山に目をむけるきっかけを提供している。また、ふもとの板宿八幡神社の厄神際の焚火の薪として伐採した材を提供することもあった。



ミニコンサート



レクリエーション

写真-5 ほくら～ととや森の世話人倶楽部の取り組み



植樹祭を毎年実施



ロープ遊び

写真-6 いたやにすとの取り組み



写真7 森の世話人による発表

(4) シンポジウム等への参加と発信

活動を行うだけでなく、取り組みの様子を積極的に外部に発信している団体も少なくない。

例えば2017年に兵庫県主催で開催された「ひょうご環境担い手サミット」では、事務所から案内をしていないにも関わらず、前述のほくら~ととや森の世話人倶楽部をはじめ、森の世話人5団体が参加し、パネル展示やポスターセッションを行い、六甲での活動を発信するとともに、他の環境活動団体との連携をさぐっていた。

(5) その他

紹介した内容は、砂防事業に係る支援として市民団体と関わってきた事務局の経験から知りえた内容を整理したものであり、本稿で報告した内容以外にも多様な活動を行っていると考えられる。

6. まとめ

- 1) 土砂災害に強い森づくりとして六甲砂防事務所の定める実施要領に基づいた森の世話人の活動に、2008年から2019年末までに延1,600回、約28,000人が参加した。
- 2) 2013年より交流の森を企画・開催したことが一助となって、森の世話人の横のつながりが強化された。

3) 交流の森は広く市民に六甲山系GB整備事業を周知する機会にもなっており、交流の森に参加する森の世話人の間接的支援にもつながっている。

4) 森づくりを目的に設立された団体も少なくないが、森づくりだけでなく、地域活性化にも関わるなど、砂防事業以外の分野にも活動の場を広げている。

謝辞：本稿の場を借り、GB事業への理解のもと森づくり活動に時間と労力を提供いただいている森の世話人に、また、発表の機会を与えていただいた六甲砂防事務所に深く感謝を申し上げる。

参考文献

- 1) 赤井 裕・木下 篤彦：平成 23 年度近畿地方整備局研究発表会発表原稿，六甲山で行っている市民参画による土砂災害に強い森づくりの各種効果について，2011
- 2) 赤井 裕：平成 27 年度近畿地方整備局研究発表会発表原稿，六甲砂防と樹林整備を進める市民・企業の 6 年の歩みとこれから，2015
- 3) 国土交通省六甲砂防事務所：六甲山系グリーンベルト整備事業広報パンフレット
- 4) 国土交通省六甲砂防事務所：六甲山系 GB 整備基本方針，1996
- 5) ほくら~ととや森の世話人倶楽部公式ブログ，<http://hokura-totoya.seesaa.net/>，2020. 5. 29